

## 挨拶：五十嵐立青（茨城県つくば市長）

こんにちは。つくば市長の五十嵐でございます。本日はお招きありがとうございます。  
先ほど（設立された労働者協同組合が）70 というお話がありましたが、つくば市にはまだ1つも設立されていないので、どれくらいお役に立てる話ができるか分かりませんが、事例もいくつかお話できればと思っております。

そもそも私が協同組合という概念を初めて知ったのは、今から25年ほど前で、スコットランドに1年いたのですが、そこにはロバート・オーウェンという経営者が作ったニュー・ラナークという工場がありました。そこでは、人間中心主義という、当時そこまでの言葉はまだなかったのですが、いかに搾取しない仕組みを作っていくか、さらにそこで作られた製品などをほぼ原価で循環させるような仕組みが作られており、生活協同組合の一つの原型になったとも言われています。それ以来、働き方、人間中心ということは私のテーマであり、政治家としても「人間性の回復」という大きな軸を持って行動しておりますし、十数年前には障害のある方が働く農場、「ごきげんファーム」という農場を立ち上げました。

障害があると、日本ではご存知のようになかなか働く機会がない。もちろん厚労省も頑張られていますけれども。一方で農業は人手がない。であれば、この人手がない農業と働きたい障害のある人を組み合わせることで、それぞれの課題を掛け合わせてプラスにしていくことができるのではないかという問題意識で立ち上げました。現在は市長に就任したことで経営からは離れましたが、150人ぐらいの障害のあるスタッフが働いています。「今まではとにかくすぐクビになって辛かった」「今までは仕事を続けられなかったけれど、初めて生きがいを持っている」「今までは生きていたけれど死んでいた。ここに来て生まれてきた意味が分かった」というようなことを言われるわけですが、いかに働くということが人間にとって本質的な欲求であり、必要なものであり、それによって誰かの役に立つということが意義のあることか、というような取組も経験してきましたので、今回法律が施行されたことによって色々なことが動き出していくのではないかと、とても期待感を持っています。つくば市でもできることをやっという、そんな背景でこの労働者協同組合にも力を入れているところです。

つくば市はTX（つくばエクスプレス）が通り、ここから約1時間で行けると思いますが、研究学園都市として発展をしてきたまちです。人口が増えており、昨年度（令和5年1月1日現在の住民基本台帳に基づく調査）は人口増加率が全国一位となっています。2年連続で転入超過率も一般市で一位ということで、非常に多くの方々に選んでいただいております。選んでいただいているのですが、市内で人口が増えている場所というのは、このつくばエクスプレスの沿線だけで、出生率1.85、高齢化率4.6%。一方で北部の地区は、高齢化率は

40%近く、出生率は1.03で、南部は出生率が0.9です。人口増加をしているエリアや年齢層も非常に偏りがあり、このままでは持続可能ではないだろうという問題意識を強く持っております。同時にコミュニティもやはり若干弱くなってきています。区会の加入率は低下傾向で、今までは高齢化率が高いエリアというのは区会加入率が高かったのですが、そういうエリアでも減少してきている。地域全体の力が少しずつ減衰している、ということが言えると思います。

ポジティブな話としては、地域の活動、市民活動というレベルにおいては非常に活発な素地があり、人口十万人当たりのNPO法人数を独自にいくつか調べてみたところ、つくば市は十万人当たり55.6となっており、東京の64.4には流石に敵いませんが、全国平均と比べても他の大都市と比べても、かなり多くのNPOがあり、私が先ほどお話した農場もこのNPOで立ち上げています。そのような意味では地域の活動や市民活動が非常にアクティブに行われています。気候市民会議という、気候問題について市民を無作為抽出で選び、市民が6回程会議をして提言を出すというものがあり、日本全国の自治体でこのような会議を行っています。「参加してくれますか？」という市からの依頼に対して「参加してもいいよ」と応諾してくれる人の割合は、全国平均だと大体2.5%程度なのですが、つくば市では11%を超え、文字通りケタが違っています。これには環境関係の研究者が驚いていて、それだけ自分たちのまち、あるいは自分たちの社会や世界を、このままではなく、何かやっつけていかなくてはならないよね、と思ってくれている人の割合が多いのだと思っております。

このようにつくば市には地域の活動や市民活動の素地として色々なものがあると思っております。私は「ともに創る」ということを就任以来ずっと言い続けていて、行政だけでできることは限られていると考えます。つくば市職員は約3,000人ですから、一事業課で十数人から数十人、係で言ったら数人あるいは1人、2人でやっているわけですね。この労働者協同組合の事業も進めていますけれども、係何人で担当しているか・・・、4人でつくば市全体の労働者協同組合の事業を全て賄うことが出来るわけないですよ。他のあらゆる事業にも同じことが言えます。市場に任せていたら失敗する、でも政府でも失敗したり、行き届かないことがある。そういうところを、市民や色々なアクターとともに創っていくことができるかが必須であり、不可避であることを、危機意識として持つとともに可能性も感じているというのが本音です。

そのような背景で色々な市民協働のまちづくりを進めています。「アイラブつくばまちづくり補助金」という、企業からいただいた寄付を何かやりたいという団体に繋いでいく補助金がありますし、また周辺市街地の取組については、先ほどお話したように人口が減少している地域でも地域の核となってきた皆さんに集まっていただいて、自分たちでまちをどう作っていくかという話をしています。

先ほども地図を示しましたが、どうしても中心部というのは求心力があるわけですね。周辺部というのはそこから人を失ってしまう。言ってみれば、中心部（コア）は求心力を持ってしまって、その周辺部（ペリフェリー）からモノ、ヒト、カネを振り受けてしまうのですが、これは地政学的に避けられないのです。私がまちづくりで目指しているのは、この中心部（コア）から周辺部（ペリフェリー）にヒト、モノ、カネを逆に動かすこと、中心部（コア）から周辺部（ペリフェリー）に遠心力を働かせていくことを常に意識をしています。これをしていかない限り、つくば市は、人口が今増えています、つくばの人口がどこから増えているかという、結局周りの自治体から吸い寄せているようなところがあります。もっと長い目で見たら、全然持続可能ではないわけですね。今、減少傾向にあるエリアで、いかに独自の活動をしていけるかということが非常に重要だと思っていて、色々な取組をしてもらっています。地元の何十年、何代も前から住んでいる皆さんに、最初は「そんな面倒くさいこと言わないで、役所でやってくれよ」「なんか建ててくれよ」とすごく言われたのですが、最近は完全に流れが変わってきて、「今度こういうことをやるから、市長絶対に来てくれよ」とか、「今度こんなものを立ち上げるから市でも一緒にやってくれよ」とか。もう主体が変わってきています。

私が常々思っているのは、市民というのはタックスペイヤーであるけれども、ただのタックスペイヤーではないし、コンシューマーでもない、ということです。サービスの消費者として市民を見るのではなく、いかに主体として市民を捉えて、市民とともにアプローチをしていくのかということが非常に大きな鍵だと思っています。先ほど人口が中心部では増えているという話をしましたが、「つくば駅前に素敵な子育て環境があるから、引っ越してきませんか？」「素敵な学校があって子育てができるから移住してきませんか？」など、そういう安易な移住プロモーションは一切禁止しています。そうやってサービスの消費者、「こんな素敵なサービスがあるから来ませんか？」という消費者を増やすようなマーケティングではなく、周辺部で自分たちで色々なまちをつくっていくのだという思いのある人たちが増えていくような、それを勝手につくば市では「クラフトライフ」と呼んでいるのですが、そのようなアプローチをして、どんどん新しい人に来てもらいたいよね、と言う話をしています。他にも SDGs を含めていろいろ取り組んでおります。

ワーカーズコープについても、このような問題意識であちこちを見て回っています。スペインのモンドラゴンにも行きましたし、パリもバルセロナにも行きました。今日は事例を少しお話ししたいと思います。地域の事例の一つとして非常に興味深かったのはイタリアのボローニャなのですが、山間部に一軒しかないバーがあり、もうそのバーが高齢化で閉じてしまうということになって、自分たちの寄り合う場所が無くなってしまふのは困る、ということで、地域の皆さんが自分たちで出資して買い取ったそうです。そうこうしていたら、子どもたちが通学できないのでミニバスを購入して送迎サービスを開始しました。そのうち今

度は、高齢者が薬を買いに行けないので、バーの隣に薬局を作って簡単な食品なども売る場所を作りました。そして自然公園に来る観光客のためにビジターセンターを作ったり、近所の農家から「もうできないから農場を買い取ってくれ」と言われて、農場を買い取ってチーズを作ったりもしています。結果として、若い人が出て行くことなく持続可能でコーポラティブな形になっています。それを行政として 10,000 ユーロ、日本円で 150 万円ぐらいを最初だけ補助して、その後は自立的にやっているというような事例があり、非常に日本の地域でも可能性があるなと思っています。

それからバルセロナ市役所には、社会的連帯経済部という部署があって、ワーカーズコープのスタートアップ拠点のようなものが作られています。この写真はまだ工事中なのですが、もう既に「コーポリス」という場所が別にあります。さらにもうすごい広さの建物全体をリニューアルしてそこにワーカーズコープを入れていくというお話をしていました。それだけ社会課題の解決にスペインでは繋がっており、年間でも補助金として最大で 500 万円近く出しているような状況があるというようなことで、社会のサービスの担い手としても認知されているということです。

つくば市でも遅ればせながら、皆様にお世話になりながら相談会や、ワークショップ、事業所見学などを実施しています。ここで対話をしながら考えていくということが大事だと思っています。私は、今だったら農場を立ち上げるときに NPO ではなく、間違いなくワーカーズコープにしたいなと思っています。焦ってなんとかとりあえず作るというよりは、それぞれの参加者が納得をしながら作る。プロセスにおいても丁寧にやっていくことが大事だと思っているので、このプロセスは丁寧にやりたいと思っています。ただ先ほどお話したように、つくば市には、素地がありますので、おそらくこういうものを積み重ねていくと、これからたくさん生まれてくるのではないかと思っています。

来年度は、先ほどのような周知の事業や伴走支援に加えて、運営の補助金も上限額を 60 万円にして、立ち上げを少し加速していくようなことをしたいと思っています。色々な取組が生まれてくると思っていますし、それに対して行政としても継続して伴走するので、先ほどの周辺市街地の取組もそうですし、不登校の取組であるとか、高齢者の取組であるとか、色々なアプローチがあると思います。そういった皆さんと幅広く、一緒に走っていくような形で進めていきたいと思っています。

「世界のあしたが見えるまち」というヴィジョンを掲げて、この新しい、ある種の資本主義をアップデートさせる、別の道を進んでいくようなことを地域で実現していきたいという思いでやっておりますので、ぜひ皆さまからも色々勉強させてもらえればと思っています。どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。